

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	地方都市における劇場の持続的運営に関する考察：オレゴン・シェイクスピア・フェスティバルを事例として
著者 Author(s)	Goto, Tomoko
掲載誌・巻号・ページ Citation	地域学論集 鳥取大学地域学部紀要, 14 (3) : 125 - 140
刊行日 Issue Date	2018-03-26
資源タイプ Resource Type	紀要論文 / Departmental Bulletin Paper
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/5707

地方都市における劇場の持続的運営に関する考察
—オレゴン・シェイクスピア・フェスティバルを事例として—

五島 朋子

A Study on The Sustainable Management for Non-profit Theatre in Local Area
Case Study of The Oregon Shakespeare Festival

GOTO Tomoko

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第14巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.14 / No.3

平成30年3月26日発行 March 26, 2018

地方都市における劇場の持続的運営に関する考察

- オレゴン・シェイクスピア・フェスティバルを事例として -

五島朋子*

A Study on The Sustainable Management for Non-profit Theatre in Local Area Case Study of The Oregon Shakespeare Festival

GOTO Tomoko*

キーワード：地方都市，非営利劇場，劇場運営，オレゴン・シェイクスピア・フェスティバル

Key Words: local area, non-profit theatre, theatre management, Oregon Shakespeare Festival

I. はじめに

本稿は、地方都市における創造型劇場の運営について、具体的な劇場事例を取り上げ、劇場運営の現状とこれまでの発展のプロセスを踏まえながら、演劇創造に関し不利と考えられる地方都市での持続的な作品創造と劇場運営の可能性を検討することを目的としている。

日本では自治体が、劇場やコンサートホールなど舞台芸術が上演できる文化施設を整備し、その数は自治体数を上回る。90年代以降、独自の企画と予算で、演劇や音楽など舞台作品を製作・プロデュースする劇場も登場し、貸し館を中心とするそれまでの施設に対し「創造型劇場」と呼ばれている。しかし、舞台の創造に携わる専門家、すなわち劇作家や俳優・演出家、また舞台技術や舞台美術などを担う人材は関連産業の多い大都市に集中している。したがって、地方都市の文化施設は都市で創られた舞台作品を購入する受け皿に留まるか、あるいは創造型劇場でも大都市の人材を起用して舞台作品を作っているのが実態であり、地方都市で創造された舞台作品が、他都市に流通したり、地域内外から広く観客を惹きつける状況には至っていない。

本稿では、大都市から遠く離れ、雄大な自然に囲まれた小さな町にありながら、巨額の劇場事業を推進するアメリカの非営利劇場に着目し、現在の事業内容や作品選定の特色、地域社会との連携や接点のありよう、劇場運営の変遷を検討しながら、地方都市における持続的な劇場運営に関する示唆を得ようとするものである。

II. アメリカの地方都市における劇場

アメリカの舞台と言えば、誰もが大都市ニューヨークのブロードウェイを思い浮かべるであろうが、実は地方都市に多くの非営利劇場が存在する地方劇場大国でもある。これら非営利劇場は日本の文化施設と違って、拠点とする町で舞台作品を創造し、地域住民に定期的に観劇の機会を提供するプロフェッショナルな組織である。非営利劇場の全米ネットワーク Theatre Communications Group (以後 TCG) には、約 500 の劇場が登録されている¹。これら全米各地に広がる非営利劇場の始まりは、ブロードウェイにおける商業劇場の隆盛に対抗し、ニューヨーク以外の地方都市に劇場

*鳥取大学地域学部附属芸術文化センター

表1 アメリカの非営利劇場 年代・事業費別件数

劇場 創設年	合計	年間事業規模					
		1	2	3	4	5	6
1910年代	4	0	1	1	0	2	0
1920年代	3	0	1	0	0	1	1
1930年代	8	1	1	3	0	1	2
1940年代	7	0	1	2	0	1	3
1950年代	14	4	0	2	3	2	3
1960年代	42	4	4	9	4	10	11
1970年代	110	23	15	40	10	16	6
1980年代	83	22	25	25	4	3	4
1990年代	129	50	45	28	3	1	2
2000年代	80	44	19	14	1	2	0
2010年代	7	5	1	1	0	0	0
記載なし	7	2	—	2	—	—	3
総合計	494	155	113	127	25	39	35

TCG 登録劇場のデータを元に筆者作成

また、現在ではブロードウェイとの共同製作も多く、これら非営利劇場無しにはアメリカの舞台芸術は成立しないとも言われる。ヨーロッパのように税金に寄って支えられる公共劇場の制度を持たないアメリカでは、このような地方都市の非営利劇場が、急速な勢いでひとつの劇場分野と産業的な仕組みを形成したのである。

2017年のTCG登録劇場494件のうち、過半数の52%が50万人未満の都市に、全体の34.4% (170件)は人口20万未満の町にある(表2)。人口規模の小さな町の劇場であっても、大都市の劇場で創られた作品の受け皿ではなく、各劇場が独自に予算を組んで舞台作品を作って、地域の観客に観劇の機会を提供しているのである。また、チケット収入の他、個人や企業から広く寄付を集め運営されており、そのためにも、学校や地域コミュニティ、企業向けの様々なアウトリーチ活動が積極的に行われている。さらに、こうした非営利劇場は、日本の文化施設に現在求められる地域や社会の課題を踏まえた事業も多数実施している。

以上のように、アメリカは地方劇場大国であり、本稿では、その中でも人口の少ない町で、80年を越えて運営されている劇場オレゴン・シェイクスピア・フェスティバルを取り上げる。

Ⅲ. 小さな町の巨大な演劇事業

1. オレゴン・シェイクスピア・フェスティバルの現在

オレゴン・シェイクスピア・フェスティバル(以後 OSF)は、人口2万人の町、オレゴン州アッシュランドにある。名称はフェスティバルだが期間限定ではなく、年間を通じて活動する劇場組織である。毎年11本の新作をつくり、2月から10月にかけて、3つの会場で上演する。年間の上演回数はおよそ800回にのぼり、延べ観客数40万人、年間総事業費約38億円(2014年実績33,450,203ドル)と、アメリカの非営利劇場の中でも最大の事業規模を誇る。

アッシュランドは、州都ポートランドから南へ約500キロ弱、最も近い大都市サンフランシスコから内陸へ約560キロの距離にあり、OSFの観客の8割は、これら大都市から5~7時間かけて自家車で訪れる。鉄道はなく公共交通機関でのアクセスは良いとは言えない。最寄りのメドフォー

を創設しようという、1950年代末から60年代のムーブメントにある。リージョナル・シアターとも呼ばれたこれらの劇場は、フォード財団の数年にわたる助成を得て、組織化、制度化、プロ化が劇的に進展し、60年代末には、質・量ともにブロードウェイに匹敵する舞台芸術分野に発展する(青野2008, 佐藤2001)。

60年代に創設された劇場の中には、現在年間10億円を越える事業規模をもつものもある(表1の「年間事業規模」は、1:50万ドル未満, 2:50万ドル以上100万ドル未満 3:100万ドル以上300万ドル未満, 4:300万ドル以上500万ドル未満, 5:500万ドル以上10,000万ドル未満, 6:10,000万ドル以上²⁾)。

表2 非営利劇場が立地する自治体の人口規模

人口	数	割合
10万未満	43	8.7%
20万未満	127	25.7%
50万未満	86	17.4%
100万未満	85	17.2%
100万以上	138	27.9%
不明	15	3.0%
	494	100.0%

ド空港から、メドフォード市街まで1時間に1本のバスで約20分、そこで20分おきの路線バスに乗り換えが必要だ。空港からアッシュランド中心地までは、遠景に山並み³と葡萄畑を望みながら緩やかな丘陵地帯を抜けて行く。アメリカ最大規模の演劇活動が展開しているとは、およそ想像のつかない雄大な自然美に囲まれている。

OSFは、アッシュランドに着任した英語教師アンガス・ボーマー(Angus Borner)が1935年に、7月の独立記念日イベントとして、シェイクスピア作品を上演したことが契機となって始まった。以来、第2次大戦中の休止を除いて、80年以上活動を発展継続させている。2017年現在、演出家ビル・ラウシュ(Bill Rauch)が、歴代5代目の芸術監督を務め、毎年11作品が日替わりで、月曜日を除く毎日上演される。ヨーロッパの公共劇場では、このように複数の作品を日替わり上演するのは一般的なプログラムだが、アメリカでは、一つの作品を3週間から1ヶ月間程度継続して上演するロングラン方式をとることが多い。OSFは、遠方からの来場者が数日間滞在して観劇することを前提として、日替わり上演というプログラム構成なのである。実際、観客は平均3~4泊し、3~4つの演劇作品を観劇している⁴。アッシュランド滞在の数日間で、最大限多様で有意義な観劇体験を提供することを目指した劇場運営となっており、1日に複数作品を上演する他、以下に見るように上演会場、上演作品、関連事業などにきめ細やかな配慮がある。

以下、本稿の記述は、関連する文献およびOSF提供資料のほか、筆者が2016年8月末から9月に訪問した際の観劇と関係者インタビューをもとにしている。

2. 上演会場の独自性と多様性

上演は主に3つの会場、Allen Elizabethan Theatre (以降エリザベス・シアター)、Angus Borner Theatre (ボーマー・シアター)、Thomas Theatre (トーマス・シアター)で行われるが、それぞれ異なる特色を持つ(図1)。

客席数も、それぞれ、1,200, 800, 300程度と、大中小劇場の役割分担となっている。

なかでも、エリザベス・シアターは、OSFを象徴する野外劇場である。シェイクスピアの生きたイギリス・エリザベス朝時代の劇場を模したとされる。1935年に、アッシュランド市が最初の野外劇場を建設し、その後火事や老朽化にともない幾度か改修・改築が行われ、現在の建物は2013年の大改修を経たものである。改修に際し、300万ドルの寄附をしたアレン財団

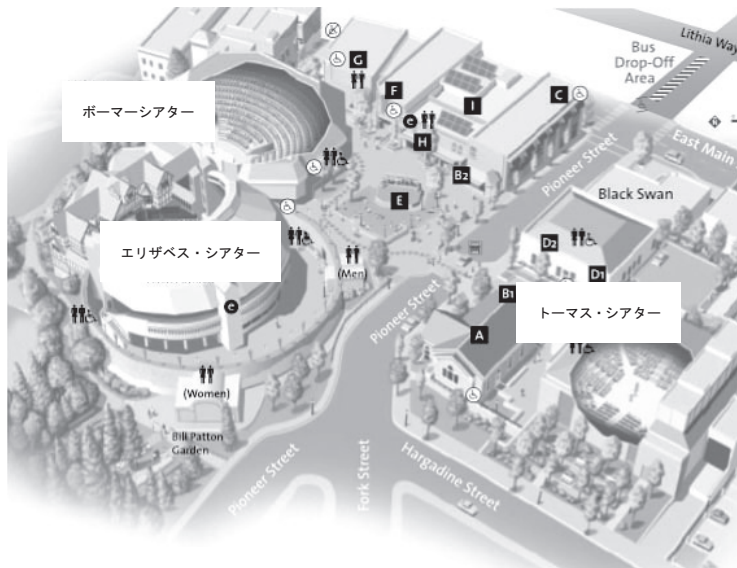


図1 配置図 3つの劇場と関連施設 (公式ホームページより)

の名前がつけられている⁵。この劇場では、シェイクスピアやミュージカルなど、集客人数が期待で

きる作品が上演される。張り出し舞台上に、左右対称3層程度のエリザベス朝の建物が設けられている(写真1)。中央の建物の2層は演技空間としても使われ、舞台の奥行きはないが、上下移動のある立体的な演出ができる。1階の観客席には屋根がないが、2階席と、2階席が張り出した1階席部分は屋根付きとなっている。観客席の傾斜の下から俳優が登退場する出入り口が、左右2カ所に設けられている。歌舞伎の花道と異なり、舞台へ近づく俳優の姿は見えないが、観客席のなかに俳優が登場し、客席と舞台を近づけることができる。

野外のため、エリザベス・シアターでの上演は、6月初旬から10月中旬までの夜のみである。乾燥したアッシュランドでは、8月でも夜間の空気は肌寒く、会場では毛布の貸し出しを行っている。星空の下、コートや毛布を羽織っての観劇は、観客に特別な体験となって強い印象を残す。

創作者の名前を冠したボーマー・シアターは、1970年に建設された。日中上演が可能な屋内劇場の整備により、作品数、上演回数、上演期間を延ばすことができ、増大する観客を収容して収益増にもつながった。張り出し舞台を持つプロセニウム劇場で、やはり観客席下部から役者が登退場する出入り口が2カ所設けられている。

トーマス・シアターはOSFでは最も新しく、2002年3月1日にオープンした。客席も舞台も可変の、実験的な上演にふさわしい小劇場である。2001年まではブラック・スワンと呼ばれる別のスペースで、実験的な作品の上演が行われていたが、設備の老朽化、観劇環境の向上のため新築された。OSFのデヴェロップメント・ディレクターのピーター・トーマスの名前が、2010年彼の没後に冠された。可変式の舞台はアリーナ(客席360)、スラストステージ(同270)、アベニュー(同230)の形に設定できる。OSF公式のサイトは、可変型小劇場を毎日変化させて上演を繰り返す使い方は、全米でOSFだけだとうたう。

これら3劇場をフルに使って日替わり上演を行い、夏期はボーマー・シアターとトーマス・シアターでは毎日2作品を上演する。上演の間の数時間で、舞台装置をばらして、次の舞台を設営するため、舞台セットもそれを考慮したものとなっている。エリザベス・シアターでも、毎日舞台セットのばらしと設営が行われるが、舞台上のエリザベス朝の建物がひとつの舞台美術となっているので、その他に大掛かりな舞台背景やセットを設置する余地はあまりなく、限られた大小の道具、照明や映像プロジェクションなどが用いられる。



写真1 エリザベス・シアター内部の舞台と客席(筆者撮影)

以上3つの劇場施設のほか、チケットセンター、レクチャーやトークが行われる会場カーペンター・ホール、ボランティアグループ「チューダー・ギルド」が運営するギフト・ショップとウエルカム・センター、事務局建物などが、分棟でOSFの街区を形成している。また、建物の間のオープンスペースに、野外無料イベントを行う「グリーン・ショー」の仮設舞台が設置される。リハーサル施設や倉庫の一部は、隣町のタ

レントに置かれている。最初から必要な機能をすべて収めた単体の施設を建てた訳ではなく、環境の変化や観客増に柔軟に対応しながら、既存建物の転用利用や土地建物の購入を経て、徐々に施設の充実が図られたため、複数の施設が地域内に点在している。それぞれの劇場にはロビーはあるが、上演の合間にあふれる観客で街区全体が OSF の劇場空間となっているのも、観劇体験の魅力といえるだろう。

3. 上演内容に関する多様性の確保

毎年 11 作品が上演されるが、すべて新演出で過年度の作品が再演されることはない。2016 年シーズンの作品・作者と演出家などを上演開始順に表 3 に示す⁶。

表 3 2016 年上演作品一覧

上演作品タイトル	作家	演出	上演時間	備考
十二夜	ウィリアム・シェイクスピア	Christopher Liam Moore	2時間50分	舞台を1930年代のハリウッドの映画スタジオに設定。
大いなる遺産	チャールズ・ディケンズ原作 Penny Metropulos & Linda Alper 翻案	Penny Metropulos	3時間	演出家は女性、87年までは俳優として活動。
The River Bride	Marisela Trevino Orta	Laurie Woolery	データなし	世界初演・劇作家はメキシコ系アメリカ人3世の女性。演出家も女性。ラテン・アメリカ文化に関する物語。
Roe	Lisa Loomer	Bill Raush	2時間30分	劇作家は女性。アレーナステージ、パークレー・レバートリー・シアター共同製作。American Revolution シリーズとして制作。女性のリプロダクティブ・ライツをテーマとする現代劇。
アテネのタイモン	ウィリアム・シェイクスピア	Amanda Dehner	2時間10分	女性の演出家。日本のアンクラ風な演出。
The Yeomen of the Guard	作曲Arthur Sullivan リブレット:W.S.Gilbert 翻案: Sean Graney他	Sean Graney	90分	ミュージカル。原作の19世紀末のロンドンをアメリカに設定。
Vietgone	Qui Nguyen	May Adrales	2時間20分	作家は、ベトナム系アメリカ人男性、演出はフィリピン系アメリカ人女性。ベトナム戦争後、アメリカへのベトナム移民をテーマとするコメディ。
リチャード2世	ウィリアム・シェイクスピア	Bill Rauch	3時間	十二夜の演出家である俳優が主演。
ハムレット	ウィリアム・シェイクスピア	Lisa Peterson	3時間	演出家は女性。ヘビメタ音楽を取り入れ、ハムレットがロックシンガーのような設定。
ザ・ウィズ	William F. Brown 音楽・作詞: Charlie Smalls「オズの魔法使い」より	Robert O'hara	2時間30分	演出家はアフリカ系アメリカ人男性。黒人少女が主演の作品。
冬物語	ウィリアム・シェイクスピア	Desdemona Chiang	2時間50分	演出家は女性。舞台設定を中国に置き換えている。アジア系の出演者が多い。

OSF 発行 2016 年 Playbill. Volume 2 及び観劇を元に筆者作成

1960 年に初めてシェイクスピア以外の作品が上演され、近年は、シェイクスピア作品 4、5 本、新作戯曲、シェイクスピア以外の古典戯曲、ミュージカルで 11 作品が構成される。2016 年は、シェイクスピアの新演出 5 本⁷、ディケンズの小説「大いなる遺産」、新作戯曲 3 本「The River Bride」「Roe」「Vietgone」、ミュージカル 2 本「The Yeomen of The Guard」「ザ・ウィズ」が上演された。新作戯曲は、ジェンダー、エスニシティ、社会的弱者など今日的な問題に着目して委嘱される。「Roe」は女性の中絶に関する権利をめぐる有名な裁判⁸を題材とした内容で、ラウシュが芸術監督着任後に開始した「アメリカの革命的な歴史」シリーズのひとつとして、ラウシュ自身が演出する話題作品である。「Vietgone」は、ベトナム戦争後のベトナムからの難民の人生をユーモアを交え描いたもの

で、劇作家はベトナム系男性、演出家はフィリピン系女性、俳優もほとんどアジア系である。11作品中、女性の演出家が6人と過半数を超え、アジア系、アフリカ系アメリカ人男性も含まれている。人種の多様性を担保しようとする努力は、既存作品の上演にも色濃く反映され、ミュージカルはアフリカ系アメリカ文化を元にした「ザ・ウィズ」、シェイクスピアの「冬物語」では舞台が古代の中国に設定されていた。年間40万席を売り切るための大衆性は、ミュージカルやよく知られたシェイクスピア作品で獲得しつつ、同時に社会的な問題意識は、新作や舞台設定、また劇作家、演出家、出演者のエスニシティやジェンダーの多様性を拡大する努力に顕著に表れている。2017年は、ネイティブ・アメリカンの劇作家の新作、ミュージカル「オクラホマ！」を同性愛のカップルに設定したことなどが上演前から話題となった。

各作品の上演期間を表4に示した。3、4日の滞在で多彩な作品が観劇できるように、プログラ

表4 劇場毎の上演作品と上演期間 (2016年Pocket Guideより)

	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
アンガス・ボーマー・シアター									
十二夜		2月19日							10月30日
大いなる遺産		2月20日							10月30日
The River Bride		2月21日				7月7日			
Roe			4月20日						10月29日
アテネのタイモン						7月28日			10月29日
トーマスシアター									
The Yeomen of the Guard		2月24日							10月30日
Vietgone			3月30日						10月29日
リチャード2世						7月5日			10月30日
アレン・エリザベス・シアター									
ハムレット					6月7日				10月14日
ザ・ウィズ					6月8日				10月15日
冬物語					6月9日				10月16日

ムが組まれていることがわかる。シーズンはじめの2月から3月には4作品を、平日に昼夜2本、土曜日に3本上演する。4月からは6作品で、金・土の週末は4本を上演する。シーズン当初からバックステージ・ツアーが行われ、4月からトークなどのイベントも始まる。5月になると日曜日の上演も3本に増え、6月にはいると野外のエリザベス・シアターでソワレが始まり9作品を上演する。6月下旬からは1日に最大5本(マチネ2本、ソワレ3本)を上演、7月初旬に作品が入替わり、下旬から10月中旬まで最大10作品を上演する。野外上演が10月中旬に終わり、屋内劇場での7作品上演で1シーズンが終わる。地域外から多くの観客を集めるOSFは、作品の本数だけではなく、上演している作品内容の組み合わせも重要である。たとえば、一般客が少ない2月は、スクール・プログラムとして学生グループを確保するため、ミュージカルとシェイクスピアが観劇できるよう、上演スケジュールが詳細に検討される。

以上のような独自の上演方式のため、シーズン中複数の作品に出演する俳優も珍しくない。悲劇「ハムレット」の主人公は、「十二夜」ではコミカルな役を演じ、「Roe」の主人公を演じた女優は「十二夜」では、主役ヴァイオラとセバスチャンを一人二役演じるという活躍ぶりである。サブキャストも同様に複数の舞台に参加しており、複雑なキャスト調整が必要になるが、数日間滞在する観客は、舞台毎の俳優の変貌振りに感嘆することとなる。

長年OSFに通う忠実な観客の維持拡大と、新しい観客の創出という二つの目的も作品選定と当然ながら深く関わっている。シェイクスピア以外の新作は、何十年もOSFに通い続けている顧客を維

持するために必要で、また新作で新しい試みが可能となり、一方世界で最も良く知られた劇作家シェイクスピアは、若者や演劇に馴染みのない観客を惹きつけるのに有効と位置づけられている⁹。このように OSF は、創設の契機となったシェイクスピアを核としつつ、作品、演出、テーマに現代性を打ち出し、劇作家、俳優、演出家など舞台創造に参加するアーティストの多様性の拡大を進めながら、観客層の多様化を図ろうとしている。

4. 関連事業の多様性

多様性への配慮は、関連する事業にも反映されている。OSF は学校や教員向けのサービスやプログラムも多数実施している¹⁰が、ここでは、一般の観客が体験できるものを取り上げる。

バックステージ・ツアーが、シーズン初めから休演日を除く毎日午前 10 時から実施されている。参加費一人 20 ドルと安くないが、筆者が参加した際は 40 名以上の参加があり、2 グループに分かれてツアーが行われた。2 時間近いツアーのうち、実際に舞台裏が見られるのはエリザベス・シアターだけで、他の 2 劇場はマチネへ向けた仕込みの真最中のため、観客席で説明を聞くだけだが、OSF の歴史、作品制作や舞台転換の裏話などに観客は熱心に耳を傾ける。

6 月下旬からエリザベス・シアターでは開演前レクチャー「プリフェイス」が、その他の公演では公演後・公演間のトークを中心としたイベント「フェスティバル・ヌーン」が実施される。シーズン当初は、週末土曜日だけだが、7 月以降はほぼ毎日実施される。俳優や舞台関係者による屋外での「パーク・トーク」以外は有料である。舞台を降りたばかりの俳優や、演出家が登壇して、観客からの様々な質問に答えるほか、作品の主題に関する歴史的な背景を解説する講演や、関連するシンポジウムや映画上映、ミニ公演、リーディング公演などが行われることもある¹¹。

以上は、観劇客をターゲットとしているが、野外無料イベント「グリーン・ショー」は誰もが気軽に楽しめる。6 月 7 日から 10 月 16 日の間、休演日を除く毎日夕方 6 時 45 分から実施される。劇場建物群の一面にある芝生広場に設けられた、幅 10m 奥行 6m ほどの仮設舞台で行われる。1951 年にエリザベス朝の音楽などを上演前に演奏したことが契機となって始まったが、現在は、ジャクソン郡を中心にアマチュアの文化活動団体からプロまで様々なアーティストが、公募で集まる。公募要項には、アッシュランドおよび OSF のコミュニティにふさわしいパフォーマンスであること、多様なジャンルを求めていること、子どもから大人まで誰もが楽しめること、また公演間のイベントのため 30 分以上 40 分以内の上演時間を遵守することなどが記載されている。参加が認められれば、参加アーティストの数や必要旅費などに応じて、報酬が支払われる¹²。これまでに参加したアーティストは¹³、ポピュラーミュージックや太鼓、民族音楽、クラシックなどの演奏、ストリートダンスや民族舞踊、ヒップ・ホップなどのダンス、マイムやマジック、アクロバット、コントなどの



写真2 ボーマー・シアター手前の仮設舞台でグリーン・ショーのリハーサルが行われている（筆者撮影）

パフォーマンスと幅広く、2016年の公演プログラムには70組がリストアップされている。観客は、芝生の上に座ったり寝転んだりしながら、ショーを楽しんでいる。グリーン・ショーは、観劇客には公演の合間のアトラクションであり、OSFには新たな観劇客を創出するという役割もあるが、ショーの雰囲気や参加アーティストのプロフィールを見ると、OSFへの参加の間口を広げることによって、演劇以外の魅力を付加するための仕掛けとなっていると思われる。また有料の演劇上演は閉じた劇場内で行われるが、野外の楽しそうなイベントは、観客ではない人にとってOSFの開かれた姿勢として分かりやすい形で示されている。

グリーン・ショーの出演者セクションと企画調整の担当 Claudia Alick クラウディア・アリック氏は、コミュニティ・プロデューサーという肩書きを名乗る。アフリカ系アメリカ人の女性で、足に軽い障害があり、人種や障害をテーマとした表現活動を行うアーティストとしても活躍している。グリーン・ショーのほか、アッシュランドやジャクソン郡内で行われる行事、例えば7月独立記念日のパレードや、1月のキング牧師記念日などのコミュニティ・イベントを盛り上げ、OSFと地域の組織・団体との連携を図る仕事も行っている。このように、グリーン・ショーは、地域と劇場をつなぐ多面的な役割を担っているものである。

5. 観客層と経済波及効果

以上のようにOSFでは、異なる特徴を持った複数の劇場で、今日的テーマによる演出や、人種・ジェンダーを強く意識した作品製作とアーティストの参加が、積極的かつ入念に展開されている。しかし、舞台上演に関わるアーティストやスタッフの人種・性別の多様さに比べると、観客席の多様化は、一見したところ顕著に表れていないようである。

OSFは3年おきに、劇場での観客調査を実施している¹⁴(表5)。2013年の調査(7,000人に配布、1,750件回収、25%回収率)によれば、OSF訪問歴が30-39年という人が23%と最も多く、次いで5年以下という人が21%となっている。また、毎年1回は訪問するという人が80%という高い割合となっている。中央値は61歳で、これは2000年が53歳なので、訪問歴の長いファンは多いものの、その高齢化が如実に現れている。観客の満足度は期待通り57%、期待以上38%と大変高い。1回あたりの平均観劇本数は3.3本、滞在日数中央値3.4日、一人一日当たりの支出209ドル、また最終学歴大学院卒57%、大学卒33%と大変高学歴である。年齢層が高いこともあり、年収10万ドル以上が48%を占めている¹⁵。人種は、アングロ・サクソンが84%と大多数を占めているが、2007年と比較すると、ヒスパニックが2%から3%へ、アジア系が3%から4%へ、複数民族と答えた人が2%から3%とわずかだが、確実に増えてはいる。スクール・プログラムなど、学校単位で観劇する場合、学生だけをみると人種はより多様化しているという。

OSFは、2010年に「観客開拓マニフェスト」(Audience Development Manifesto)を発表し、年齢、社会・経済的状況、人種、障害などの多様性を観客層の中で広げて行く戦略を示している。そこには、以上のデータからも明らかな観客層の高齢化と今後の減少、そして地域社会および劇場組織内における人種差別に対する危機意識がある。比較的高額と思われるチケット代は、4月や10月のシーズンオフの価格設定を見直し、家族を対象とした割安価格が導入されており、また障害者だけで

表5 観客調査結果概要

		2013年	2010年	2007年	2004年	2000年
目的	フェスティバル	81%	78%	79%	83%	84%
	休暇	5%	11%	9%	7%	7%
訪問歴	5年以下	21%	33%	20%	24%	N/A
	6-10年	17%	9%	15%	11%	N/A
	11-14年	10%	9%	11%	12%	N/A
	15-19年	11%	7%	9%	11%	N/A
	20-29年	19%	17%	21%	22%	N/A
	30-39年	23%	15%	18%	13%	N/A
	40年以上	N/A	10%	7%	6%	N/A
訪問頻度	毎年	80%	66%	59%	67%	74%
	2年に1回	11%	16%	21%	17%	12%
	3年に1回	4%	7%	10%	6%	5%
	4年に1回	4%	11%	10%	10%	8%
満足度	期待以上	38%	58%	37%	37%	41%
	期待した通り	57%	49%	59%	60%	59%
	期待以下	5%	3%	4%	3%	0.5%
平均観劇本数	3.3	3.3	3.6	3.7	3.7	
滞在日数	3.4	3.2	3.4	3.7	3	
1日の支出額(チケット代除く)		209ドル	153ドル	125ドル	107ドル	93ドル
学歴	大学卒	57%	56%	58%	56%	51%
	大学院卒	33%	30%	29%	31%	35%
年齢中央値	61	59	58	55	53	
収入	10万ドル未満	52%	—	—	—	—
	10万ドル以上	48%	—	—	—	—
人種	ヒスパニック	3%	2%	2%	—	—
	アフリカ系	1%	1%	1%	—	—
	アングロ/白人	84%	83%	87%	—	—
	アジア系	4%	2%	3%	—	—
	ネイティブ・アメリカン	1%	1%	1%	—	—
	多民族	3%	5%	2%	—	—
居住地						
カリフォルニア州	カリフォルニア州計	39%	40%	39%	44%	43%
	南カリフォルニア	4%	5%	4%	3%	4%
	ベイエリア	22%	17%	18%	19%	21%
	サンノゼ		2%	4%	4%	2%
	サクラメント	9%	9%	10%	9%	7%
	その他	4%	7%	3%	8%	9%
オレゴン州	オレゴン州計	40%	42%	43%	38%	37%
	ローグ・バレー	15%	12%	13%	10%	13%
	ポートランド	23%	17%	15%	13%	11%
	セイラム/ユージーン	0%	11%	12%	12%	10%
	その他	2%	2%	3%	3%	3%
ワシントン州	ワシントン州計	15%	12%	12%	13%	12%
	シアトル/タコマ	13%	9%	8%	9%	7%
	その他	2%	3%	4%	4%	5%
その他国内外	6%	6%	6%	6%	8%	

OSF 資料より筆者作成

したホテルは、名前もシェイクスピアにちなんだ「Stratford Inn」で、ホテルのフロントや廊下、

なく、高齢化するコアな観客にも対応できるよう、車椅子席のほか、聞こえにくい人のためのイヤホンの整備、手話付き公演の実施、さらにOSF 敷地内のバリアフリー化の徹底のための工事を計画している。また、スペイン語字幕の上演も定期的に行っている。これらの取り組み成果が、より顕著にみえるまでには、もう少し時間が必要であるのかもしれない。

事業費とその経済波及効果について触れておく。2015年の事業費は3,400万ドル、そのうち2,600万ドルが人件費に充てられている。年間予算の70%を自主事業費でまかなっており、そのうち2,280万ドルがチケット収入である。TCGの年報によれば、全米の非営利劇場の事業費収入は平均50%程度であり¹⁶、OSFは演劇上演による自己収入割合は極めて高いといえる。ただ、OSFでは、寄付金収入を非営利劇場の平均的な割合にまで増やすことを計画している。寄付金収入を増やすことによって、観客の多様性を拡大する事業にもより支出できると考えられているのであろう。

また、2015年の延べチケット販売枚数は390,380枚で、実際の観劇人数は地元15,162人、訪問者88,784人、合計103,946人と計算されている。個人か、団体または学校単位での訪問かによって、滞在日数と1日あたりの消費額を算出し、その結果2015年の経済波及効果は、訪問客のチケット代を除く消費額推計55,332,927ドルにOSFの事業費35,182,783ドルを加えて、オレゴン州の乗率2.9(産業連関係数)から約2億6千万ドル(約294億円)という大きな額が算出されている¹⁷。

OSFは1935年の創設当初から、アッシュランド市や商工会議所と協働して開催しているという歴史もあり、地元の事業者との関係も良好である。劇場周辺のメインストリートの商店やホテルは、OSFと連携したサービス提供を行っており、観劇訪問客は街全体のホスピタリティを感じ取ることができる。たとえば、筆者が宿泊

またカフェや朝食会場に、これまでの OSF のポスターが展示されているほか、過去のスペイン・プログラムが閲覧できる。フロントの脇には、各演目の評判を示す星取り表の掲示や、宿泊客が観劇コメントを記入できる用紙と、記入済み用紙がファイリングされていた。また、訪問客は宿泊を前提としているため、ホテルやモーテルの他にも B&B タイプの宿泊施設も多い。中には、ベイエリアでの IT 関係の仕事をやめて、豊かな自然の中に文化的な活動のあるアッシュランドを敢えて選んで、宿泊施設を始めたという小規模経営者もいる¹⁸。OSF によれば、アッシュランドは不動産価格が高く、劇場付きの俳優やスタッフの住居、期間限定の公演参加メンバーの滞在場所は、近隣のタレントやメドフォードが多いという。アッシュランドの不動産店舗の広告などからも、居住地としての人気があり住宅価格は上昇傾向にあることが伺えた。劇場という文化施設、そこに集う可処分所得の高い観客向けの洗練されたレストランやギャラリーなどの文化的資源の集積が、大自然のなかの小さな町の不動産価格上昇に影響を与えていることも考えられるが、より詳細な検討が必要である。

6. 劇場の使命としての多様性

以上のように「多様性 (diversity)」は、これまでの忠実な観客を満足させつつ、新たな観客を創出するための OSF の重要なコンセプトとなっている。しかし、単なる観客数拡大が目指されている訳ではない。それは、ラウシュの芸術監督着任と同日に、「観客開拓」マネージャー (Audience Development Manager) として採用されたフレダ・カシージャス (Freda Casillas) の具体的な仕事に象徴される。ラウシュは着任早々まず、「観客を変える」と宣言したという¹⁹。舞台作品に携わる俳優などアーティストだけではなく、表に見えない管理運営組織と技術スタッフ、そして観客席、さらには社会全体と、OSF という組織に関わる活動すべてにおいて、平等、多様性、包摂 (equity, diversity, inclusion) の拡大が明確に使命として示された。カシージャスの仕事は、「文化的結合 (Cultural Connection)」と呼ばれる外部へ向けたマーケティングを戦略的に組み立て、地域コミュニティや多文化コミュニティとの交流を作り出し、ひいては OSF に参加し支持する人々の幅を広げることを目指している。そして、観客席や支持者のみならず、組織内の多様性の確保へむけた取り組みも彼女の重要な仕事である。彼女自身も、メキシコ生まれでスペイン語を母語とする。自分の役割は、見落とされたり意識されないレイシズムや性差別を、上演作品、人事、会議、マーケティング、様々な側面で、「ここにも差別が！そこにも差別がある！」と、組織全体に意識化させることだという。

現在 OSF には、約 600 名の常勤スタッフがおおり、そのうちの 4 分の 3 が年間を通じて働いている。10 年前、俳優には非白人がいたが、内部スタッフは印刷室に一人ただけで、その後彼女が雇用された 2007 年にわずかに増えて 4 人、そして 2016 年によく 64 人に増えた。俳優は、毎年演目が変わるので割合は変動するものの、2016 年は 51% が非白人になり、劇場の外の世界をリアルに反映する数字になっている。2040 年代半ばには、アメリカの人口の半数以上を非白人が占めると推計されており、特に 35 才以下人口はそのスピードが速いと考えられている。テキサス、ハワイ、カリフォルニア、メキシコの 4 州ではすでに、白人は過半数を割り込んでいる。社会を反映する劇場には、チケットを購入する人々、つまり観客の変化が必要なのだという。

カシージャスはラウシュに対し、まず、OSF プログラムの構成に関し、非白人をテーマにした戯曲、非白人劇作家の作品、女性作家や性的マイノリティが書いた作品を増やすことが必要だと訴えた。同時に、外部とのコネクションづくりが、様々な方法で試みられている。例えば、シェイクス

ピアの「尺には尺を」に女性のマリアッチ（メキシコ音楽）が登場した際には、ラティノ・コミュニティにアプローチして集客につなげるなど、作品のテーマや内容、演出と絡めて、エスニック・コミュニティとコンタクトを図る。また、集客以外にも、たとえば中国人コミュニティには、南オレゴン中華文化協会のメンバーを通じて、協会が行う旧正月パレードへの参加や支援を申し出るなど、地道なコネクションづくりが積み重ねられている。現在でも、非白人コミュニティからは、「OSFは白人のためのもの」と言われることもあり、イメージや関係性を変えていくことが重要だと考えているのである。80年を超える歴史の中で、関わることができなかつた地域コミュニティやエスニック・コミュニティにつながりを作り出していくことが彼女の仕事である。

こうした活動は、観客のプロフィールに少しずつ変化をもたらしている。非白人の割合は、チケット購入者では10%だが、来場者では18%、また初めての来場者では20%を占めるという。来場者に占める非白人の割合を増やすだけでなく、OSFを繰り返し訪問しOSFを支える中核となる観客のプロフィールの多様性拡大が目標となっている。

IV. 一人の男の情熱が生んだ巨大な地域劇場—OSF 発展の歴史

本節で、OSFの拡大・発展の歴史を簡単に振り返っておきたい。OSFは、アンガス・ボーマー（1904年生、1979年没）という一人の男の、シェイクスピア作品を作品が生まれた時代に忠実に上演したいという情熱が契機となって生まれた。

OSFが、60年代の劇場運動を発端とする非営利劇場と異なる点は、ブロードウェイへの対抗という文脈以前に活動が始まったこと、シェイクスピアの上演が目的であったこと、プロの演劇人のイニシアティブではなくアマチュアの上演活動だったことである。アマチュア演劇人の発意が、アメリカの非営利劇場の中でも質量ともにトップレベルの劇場を生み出したのである。出自は違えど、60年代のムーブメントから誕生した劇場と同様に、制度化、専門化、職業化の過程を経て、マネジメント機能を備えた大規模劇場として成長発展してきた側面もある。しかし、アッシュランドが大都市から離れた小さな町であったことが、その後の発展に独自の特徴を与えていったように思われる。

ボーマーは、ワシントン州ベリングハムで生まれ、1923年地元のワシントン州ノーマル・スクールを卒業、1931年にアッシュランドにあるノーマル・スクールの英語教師として着任する。1930年の夏に、シアトルのワシントン大学に招かれたイギリス人俳優・演出家ベン・アイデン・パイン（Ben Iden Payne）が演出したシェイクスピア作品に参加している。このとき、エリザベス朝の上演に強い関心をもったことが、後のアッシュランドでのOSF創設につながる。以下、OSFの歴史を①1935-41年を創設期、②1947-69年を基盤構築期、③1970-83年を通年の劇場運営体制が整えられて行く拡大発展期、④1984-94年を上演サイクルと米国内のリージョナル・シアターにおける位置づけが定着する確立期、⑤1995年以降を劇場による多様性と包摂性という新たな目標設定に見られる革新期として整理した。

1935創設期 1935-41年

1935年、7月2日から4日の3日間に「ベニスの商人」と「十二夜」の2作品が上演された。以降、毎年7月に、定期的にシェイクスピアを上演する。37年に、オレゴン・シェイクスピア・フェスティバル協会が、運営を担う組織として創設される。第2次大戦により休止する1941年までには、OSFはアッシュランドの夏期のシェイクスピア演劇祭として定着する。

②基盤構築期 1947-69年

第2次大戦後の1947年、ボーマーが兵役からアッシュランドに戻りフェスティバルが再開される。1970年に新しく屋内劇場が建設されるまでに、現在の運営の基盤となる組織や体制が生まれている。1947年には劇場が改修され、1951年にはグリーン・ショーも始まり、翌52年にボランティア組織チューダー・ギルドが創設されて、現在に至る。

1953年に、ウィリアム・パットン (William Patton)²⁰が有給の常勤総支配人として働き始め、夏期限定のアマチュア演劇上演団体から、通年の劇場組織としてのプロ化の道が始まった。オレゴン州生まれのパットンは、ボーマーが退役軍人のための制度を使って40年代に在籍したスタンフォード大学で知り合い、夏休みにOSFを手伝うようになった。有能なアドミニストレーターであり、人柄も良く誠実で、カンパニー、周囲のコミュニティ、市役所といった立場の異なる人々を結びつけ、協働を可能にしたと高く評価される²¹。また、舞台美術・舞台監督として、リチャード・ヘイ (Richard Hay) が雇用されたのもこの頃であった。

1958年の「トロイラスとクレシダ」でシェイクスピア全作品上演が一巡、同年バックステージ・ツアーが始められる。1960年には、初めてシェイクスピア以外の作品が上演され、その後、シェイクスピア4作品、その他の作品1本という構成で上演が続く。1959年には、新しい野外劇場がオープンし、座席数も拡張される。1958年の上演期間は7月から9月の夏期で、観客数は約1万人だったが、1963年には観客数5万人に増大する。

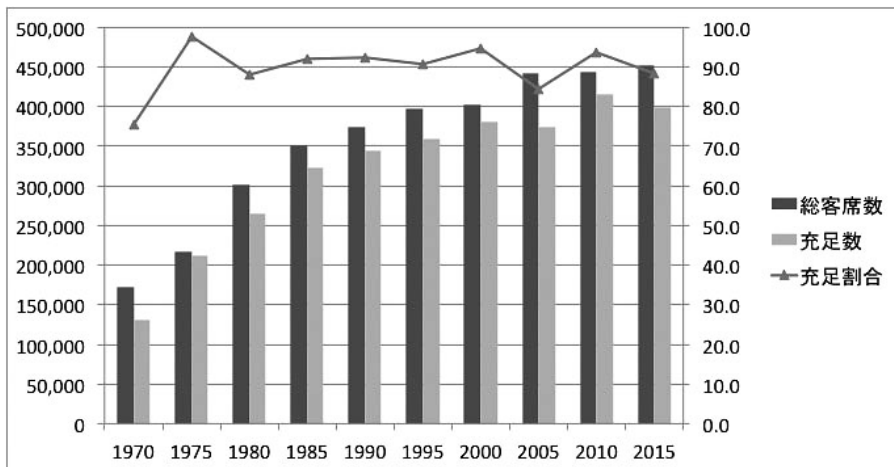


図2 総客席数と充足数 (1970-2015年) 左軸: 人数・横軸: %

③拡大発展期 1970-82年

1970年に屋内劇場が開場し、公演期間は2月から10月に伸び、客席数(チケット枚数)は1980年には30万席と飛躍的に増大する(図2)。通年の劇場組織として運営されるようになり、そのための体制が整えられた拡大発展期と言える。1971年に創設者ボーマーが芸術監督を退き、ジェリー・ターナー (Jerry Turner) が2代目の監督となり、芸術監督と総支配人の2人体制が明確になる。70年代当初の観客数は、15万人程度であった。600席のボーマー・シアターに加えて、1977年には既存建物を改修して座席数140の小劇場ブラック・スワンがオープンし、客席数の拡大だけではなく、実験的な作品の上演も可能となった。1年に9作品、うち4本程度がシェイクスピア作

品という上演プログラムが定着する。NEA（全米芸術基金）の助成を受けて、学校訪問プログラムが1973年に創設され、アウトリーチ事業が行われるようになり、この期間に上演サイクル、劇場組織としてのマネジメントが構築され定着したといえる。

④確立期 1984-94年

OSFは1983年に、トニー賞リージョナル・シアター部門²²を受賞、1984年には、俳優組合(Actor's Equity Association)との特別契約を結ぶことで組合資格を持つ俳優の参加を増やし、アメリカにおけるプロフェッショナルな劇場としての位置づけを獲得していく。1985年に創設50周年を迎える。1991年にターナーが退き、ヘンリー・ヴォロニクツ(Henry Woronicz)が3代目の芸術監督に就任する。1988年には、オレゴン州都ポートランドにOSFのサテライトを運営するという動きもあったが、1994年にポートランド・センター・ステージとして独立した別の劇場として運営されることになる。90年代には、「ベニスの商人」の手話付き上演や、オーギュスト・ウィルソンの作品が上演されるなど、多様性に配慮する動きが生まれてくる。

⑤革新期 1995年以降

1995年、長らく総支配人を務めたパットンが引退を表明し、ポール・ニコルソン(Paul Nicholson)が総支配人に着任、4代目のリビー・アペル(Libby Appel)が初の女性の芸術監督となり、劇場組織の中には「ダイバーシティ・カウンシル」が設けられた。アペルは在任中に非白人俳優を3分の1に増やし、新作上演の間口も広げ、新しい観客の獲得を試みた。その後2007年に芸術監督となったラウシュは、その路線を継承発展させている。

1958年、1978年、そして1997年の「アテネのタイモン」でシェイクスピア全37作品上演が3回終了した²³。1998年にはOSFプロデュースの世界初演作品Lillian Garrett Groagの「The Magic Fire」は、ワシントンDCのケネディ・センターでも上演され、タイム・マガジンが選ぶその年の優れた演劇作品ベスト10にはいった。1999年の年間観客数は374,246人を数え、93%の座席充足率という質・量ともに全米規模の劇場という位置づけが確立したといえる。老朽化したブラック・スワンに代わる新しい劇場が、2002年にオープンし、客席数が少し増加する。2003年にタイム・マガジン(2003年6月2日号Vol. 161 No. 22)で、全米トップ5のリージョナル・シアターの一つに上げられ、また、同年12月22日の同誌では、バークレー・レポートリー・シアターとの共同制作によるDavid Edgarの「Continental Divide」が2003年のベスト1に選ばれ、新作プロデュースでも高い評価を得た。

2007年アペルが引退し、ラウシュが芸術監督に就任し、この年観客数が初めて40万人を超え、創設75年を迎えた2010年には、年間総観客数は414,783を数え、劇場運営、新作プロデュース、観劇観光による地域経済へのインパクトと、多くの側面での評価を得るに至っている。

V. OSFの持続的な発展を支えた要因

以上、OSFの事業展開について、上演作品、会場、関連事業、組織運営における多様性を担保するための様々な実践を中心にみてきた。また、都市から遠く離れた小さな町で、アマチュアの夏期限定フェスティバルが、全米最大規模の非営利劇場へ発展してきた歴史を振り返った。アメリカには、劇場の持続的な運営を支える産業としての基盤や非営利組織の制度が整えられているとはいえ、OSFは観客の8割が地域外からの訪問者であり、同時に地域にも根ざして持続的に発展してきた要因として、以下をあげることができる。

①作品：シェイクスピアを上演プログラムの中核とすることで、知名度を持ちながら実験もできる

16世紀末から17世紀初めに書かれたシェイクスピア作品は、近代戯曲のような写實的・自然主

義的な主題や表現ではないこともあり、場所や時代設定について多様な解釈を許容する。どちらかと言えば、アメリカの非営利劇場のシーズン・プログラムでは、時間経過に沿って物語が展開するようなストレートプレイが趨勢を占めるが、それに対し抽象度の高いシェイクスピア作品が核となっていることで、バラエティに富んだ演出の面白さをひき出し、観客の想像力を刺激することにつながっているといえる。一方、シェイクスピア作品にはよく知られているものが多いため、意欲的な演出に取り組むことも可能であり、それがひいては公演の質を保つことにつながっていると思われる。また、シェイクスピアという核があることによって、それ以外の作品で、多様なテーマを試みる自由を獲得できている。

②劇場：野外劇場という特別な観劇空間とそれを補強する特徴的な屋外劇場を併せ持っていること

「星空の下でシェイクスピアを」というキャッチフレーズのとおり、野外劇場での観劇体験が、OSFの物理的また精神的なランドマークとなっている。野外上演は、日没後の空の変化、風や気温など体感する要素が多く、同じ空間にいる観客同士や俳優との一体感も強まり、初めての訪問客にはスペシャルな観劇体験となって印象づけられ、またリピーターにも飽きられないことがない。アッシュランドが、広大な山脈と平原のただ中であって、都市の喧噪から免れていることも、野外劇場の魅力を実際立させている。野外劇場での観劇体験を最大の魅力としつつ、複数の屋内劇場では、寒さや風を気にせず、舞台鑑賞に集中することができ、全体として観客の極めて高い満足度の醸成につながっている。

③環境：大都市から離れた広大な自然環境の中にありながら、町の中心部は滞在を支える宿泊・飲食機能が充実し、徒歩での快適な散策空間も確保されていること

OSFの劇場群は、アッシュランドのメインストリートの一画にある。周囲は広大な丘陵だが、アッシュランド中心地にたどり着きさえすれば、劇場も宿泊施設もレストランもスーパーも、徒歩圏内である。緩やかに広がる山並みを眺めながら、立ち並ぶギャラリーや古本屋に立ち寄りたり、カフェで休憩したり、美味しいエスニック料理をオレゴン州の地元ワインで楽しむことができる。大都市から離れた「田舎」にありながら、OSFの観劇前後は都市的な滞在ができる。

④連携：劇場、自治体、商工会議所、ボランティアグループの長年にわたる連携と協働があること

OSFの観客の8割は、車で数時間かけて訪れる。アッシュランドを含むログ・バレー地域には、ハイキングやラフティング、あるいはスキー、またワイナリーなど豊かな自然を楽しむ観光メニューはあるが、それ単独で多くの滞在観光客が訪れるというわけではない。そのためOSFは、目的地として選ばれる劇場を育てて行く必要があった。高いチケット代を払って、数日間滞在することのできる観客は、可処分所得の多い高学歴・高収入の階層であり、それだけの経済的・時間的負担に見合うと思われる観劇体験を提供し続けねばならない。劇場は公演内容の質を維持するとともに、滞在中の多様な経験とプログラムを提供し、民間の商業者が、快適な滞在を支える宿泊と飲食、ギャラリーやショッピングを提供し、訪問客の経験全体が充実する。そもそもOSFの創設は、ポーマーと商工会議所、自治体との協働によるものであり、OSF理事会にもアッシュランドの商業者や観光、教育、健康などの仕事に携わるメンバーが含まれており、これら地域内の組織の重層的な連携の積み重ねが、OSFの強みであると思われる。

以上のように、OSFが人口集積地から遠い「田舎」で始まったことが、劇場活動の魅力の維持と多様化への大きな動機付けとなり、小さく始まり、観客の要請や社会の変化を丁寧に受け止めながら、緩やかにまた柔軟に変化させてきたことで、OSFは全米最大規模と質の劇場へ発展させたと考えられる。

VI. むすびにかえて

2007年5代目の芸術監督ビル・ラウシュは、OSFの「観客を変える」と、着任の初日に宣言した。当時OSFは、チケット販売枚数40万枚越えを維持しており、上演作品も非営利劇場のプロダクションとしてそれなりの評価を得ており、特に大きな問題はなく、成功していると内部的にも考えられていた。ラウシュは、OSFに着任するまで、地域コミュニティの様々な課題を抱えた住民と協働で演劇作品を創る活動をしてきたが²⁴、代表的な非営利劇場のひとつであるOSFこそ、現実のアメリカ社会を積極的に、またリアルに映し出して行かなくてはならないと考えたのではないか。観劇という娯楽の提供を越えて、地域社会の一員として社会に関わり、より良い社会を育むために、優れた演劇上演を通じて何ができるのか、という社会実践として地域の劇場が捉えられているのである。

日本の地方都市で公立ホールや文化施設が、独自に演劇やダンスなどの舞台作品をプロデュースし、地域内外の住民に提供していくためには、確かにアメリカの非営利劇場の成立を可能にするような、組織的・経済的基盤の確立、非営利劇場の全国的ネットワークの形成、劇作家・演出家・俳優といった創造を担う専門家や舞台スタッフなどの職業的基盤の確立(プロ化)が不可欠ではある。しかし、OSFの劇場運営にみるように、目の前の地域社会や住民の抱える課題や地域の資源を丁寧にくみ上げながら、現在の文化事業をより豊かに意義あるものにして行くために、現状でできる努力や工夫がまだまだあるのではないだろうか。

参考文献

青野智子(2008)「芸術」でも「娯楽」でもなく— アメリカ合衆国におけるリージョナルシアターの公共性—, 演劇映像学, 第1集, 395-440.

Angus L. Bowmer (1978) *The Ashland Elizabethan Stage, The Oregon Shakespeare Festival Association, Oregon.*

Oregon Shakespeare Festival (2015) *Oregon Shakespeare Festival Long Range Plan 2016-2025 With Three Year Priorities, Oregon.*

佐々木昌子(1996)リージョナルシアターとシェイクスピア劇: アッシュランドのまちづくりを例に, 文化経済学<日本>論文集, 第2号, 109-117.

佐藤郁哉(2001)非営利型芸術生産システムの形成: 「レジデント劇場革命」とフォード財団, 一橋大学研究年報商学研究, 42, pp. 161-210.

Theatre Communications Group (2015) *Theatre Facts 2014: A Report on the Fiscal State of the U. S. Professional Not-for-Profit Theatre Field.*

¹ アメリカ合衆国内国歳入庁の免税対象 IRS の書式 990 を満たす非営利の劇場・劇団は、2,000 近くにのぼる (TCG, 2015)。

² 1ドル110円換算で、順に、5,500万円未満、1.1億円未満、3.3億円未満、5.5億円未満、11億円未満、10億円以上である。

³ シスキュー山脈とカスケード山脈と呼ばれる。

⁴ OSF が3年おきに実施している観客調査結果による。

⁵ マイクロソフト社の共同創業者であるポール・アレン Paul G. Allen が1988年に創設したポール・アレン一族財団は、これまでOSFに対して11,000,000ドル(約12億円)の寄附をしている

⁶ 日本語翻訳のある作品と作家名以外は、英語のまま表記した。

⁷ 2016年は、シェイクスピア没後400年であったため、例年より1本多かった。

- ⁸ Roe vs Wade (ロー対ウェード) 事件と呼ばれ、1973年アメリカで女性の中絶する権利を認めた判決である。その原告であったローと弁護士ウェディントンとのやりとりをめぐる作品。
- ⁹ 2016年9月1日芸術監督ビル・ラウシュへのインタビューによる。
- ¹⁰ 複数の俳優が学校訪問し、シェイクスピア理解や演劇ワークショップなどを行うアウトリーチ事業は45年以上の蓄積があり、その他アッシュランドでの学生向けもしくは教員向けのレクチャー付き公演、サマーセミナー、団体観劇などが行われている。
- ¹¹ 2016年は、10月にアッシュランドで第5回全国アジア系アメリカ演劇フェスティバルが開催されるということで、そのプレ企画として、リーディング公演やレクチャーが行われていた。
- ¹² <https://www.osfashland.org/work-with-us/work-with-the-green-show.aspx>
- ¹³ OSF公式サイトに掲載されており、複数年参加しているアーティストや、演劇上演に参加している音楽家が演奏することもある。
- ¹⁴ 2000年～2013年5回分の調査結果概要をOSF事務局より入手。公式サイトよりダウンロード可能。
- ¹⁵ 年収区分は、10万ドル以下と10万ドル以上の2種類のみである。
- ¹⁶ TCG発行 Theater Facts 2015。
- ¹⁷ Oregon Shakespeare Festival State and Local Economic Impact-2015をOSF事務局より入手。公式サイトよりダウンロード可能。
- ¹⁸ 2016年9月3日 Chanticleer Inn B&B オーナーEllen Campbell への聞き取りより。また、佐々木(1996)も新規事業者の移住について記述している。
- ¹⁹ 以降、2017年8月31日デヴェロップメント・マネージャーであるカシージャス氏へのインタビューより。
- ²⁰ 2011年83歳で亡くなる。
- ²¹ Oregon Live The Oregonian 2011年1月14日付け記事 ‘Longtime Oregon Shakespeare Festival leader Bill Patton dies at 83’。
- ²² 1947年に創設されたトニー賞は、アメリカの演劇・ミュージカルにおいて最も権威ある賞とされ、ニューヨーク・ブロードウェイで上演された舞台を対象としたものだが、特別賞として1979年から地域劇場への賞が設けられた。批評家による推薦で、とくに新作製作への貢献が期待されている。
- ²³ ラウシュは、2017年から10年間というスピードで、次のシェイクスピア全作品上演を完遂するというプログラムを発表している。
- ²⁴ ラウシュは、1986年に創設されたCorner Stone Theatre Companyの共同創設者である。この劇団は、アメリカ各地の地方に滞在しながら、地域住民と様々な舞台作品を上演し、地域コミュニティにインパクトを与える演劇活動を展開、1992年からロサンジェルスを拠点に活動は継続されている。

(2018年1月26日受付, 2018年2月2日受理)